

山形県の古代窯業遺跡

期間／'96年4月27日～7月31日



▲大神窯跡出土・米沢市教委保管

一万年以上もの間、人々に利用されて来た焼き物に、一つの変化があったのは5世紀前半のことです。そのころ、韓国から登り窯の技術が伝来しました。これで焼いたのが須恵器と呼ばれる硬質な土器です。山形県で須恵器が生産されるようになったのは8世紀からと考えられます。この企画展では、主に「窯あと」から出土した須恵器を展示しました。

◇特別講演会◇

◆演 題／

「東日本の古代窯業生産と流通」

◆講 師／国立歴史民俗博物館教授

吉岡 康暢 氏

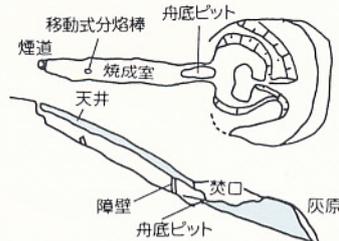
◆日 時／6月8日(土)午後1時30分より

◆受 講 料／700円(資料代)

◆申し込み／電話にてお申し込みください。
(当日も可)



地下式登り窯模式図



半地下式登り窯模式図

おしらせ

●風土記の丘写生大会

●期 間／5月4日(土)・5日(日)
※子供の日は入館無料。

●参加費／100円

*誰でも参加できます。菜の花の咲く季節、資料館周辺から安久津八幡神社まで、あなたの目でもう一つの風景を見つけてください。

●春の遺跡めぐり

●期 日／5月12日(日)
川西町下小松古墳群周辺を予定しています。

●募集人数／20名

●参加料／1,600円(入場料・昼食代として)

●集合場所／当資料館

●見る・聞く・ふれる遺跡の旅

「三内丸山遺跡と亀ヶ岡文化を訪ねる」

●期 間／6月1日(土)～2日(日)

●募集人数／40名

●料 金／29,000円(大人1名)

●締め切り／5月10日(金)

●主 催／うきたむ考古の会

山形県立 うきたむ

風土記の丘 考古資料館

住所 東置賜郡高畠町大字安久津2117
電話 0238-52-2585





生産のはじまり

全国的に最も古い窯跡は、大阪府の和泉陶邑をはじめ北九州、東日本では仙台市大蓮寺などで発見されています。それは5世紀前半です。当時の百濟・新羅・伽耶（いまの韓国）などからやってきた渡来系の人々によって生産が始められました。

それが6世紀には西日本全域に広がり、7世紀はじめにはいまの福島県あたりにも及びますが、山形県で須恵器生産が始まったのは、8世紀前半で、米沢市木和田窯、高島町味噌根窯が今のところ最も古い窯跡です。しかし、今後7世紀の窯が発見される可能性はあります。



古代の役所との関係

山形県の須恵器生産のはじまりは、この地域が律令制による古代国家に組み入れられる8世紀前後です。つまり古代の国府や郡衙のまわりに比較的多く窯業遺跡が分布すること、はじめから官窯として成立し、発展していたことを示しています。須恵窯は役所が管理し、最初は役人が使用し、やがて民衆の中にも広まっていったと思われれます。



須恵器の衰退

10世紀後半から11世紀にかけて、須恵器を作る古代窯業はだいに衰えていきます。律令体制がすたれて行くにつれて国家の保護がなくなったことが一番の原因でしょう。他に、食器として木製の漆器が多く用いられるようになったこともありましょう。

瀬戸・常滑・越前などでは、大胆な改革によって中世陶器へ移っていきます。これら中世陶器の流通も地域の古代窯の衰退に拍車をかけます。

●展示窯業遺跡資料一覧●

No	窯跡名	所在地	点数	保管者
1	他地域から 搬入の須恵器		5	山形県埋蔵文化センター 高島町教育委員会 本資料館
2	ミンソネ	高島町安久津	20	本資料館
3	木和田	米沢市木和田	5	米沢市教育委員会
4	大神・他	米沢市下小管	35	米沢市教育委員会
5	増山	川西町壇山	20	川西町教育委員会
6	平野	南陽市梨郷	11	南陽市教育委員会
7	三ヶ刈	上山市四ツ谷	9	上山城
8	平野山14地点	寒河江市柴橋	9	寒河江市教育委員会
9	二子沢 D1・E1号	天童市二子山沢	20	天童市
10	荒沢1号	鶴岡市六荒	20	致道博物館
11	山口	鶴岡市西目	10	致道博物館
12	山海11号・他	平田町山屋新田	20	山形県埋蔵文化センター
13	願瀬1・4号	酒田市生石	7	酒田市教育委員会
14	城輪遺跡 出土軒瓦	酒田市城輪	6	酒田市教育委員会
15	安久津古墳群 など	高島町安久津	18	高島町教育委員会
計	18 遺跡		205	

山形県の 古代窯業遺跡

〈第5回企画展〉



◎期間／

1996年4月27日(土)～7月31日(水)

◎休館日／

月曜・祝日(4月29日・5月3日～5日は開館)

《子どもの日は無料入館日》

◎開館時間／

午前9時～午後4時30分まで

山形県立 うきたむ

風土記の丘 考古資料館

〒992-03 山形県東置賜郡高島町大字安久津2117
TEL(0238)52-2585



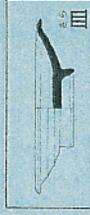
須恵器とは

日本では5世紀の前半からつくられています。灰白色や灰黒色をした陶質の土器で、ロク口で整形され、のほり窯で焼かれています。古代の陶部（すえつくりべ）がこの生産に当たったことが「日本書紀」などに出ています。そして製品は陶器（すえのうつわ）と呼ばれ、渡来系の工人集団がこの製作にあたりました。したがって源流は韓国の古代土器に求められます。ほぼ古代を通して、奈良・平安時代の後期まで製作使用されていますが、時期によって形が変わります。

その他古墳時代には、罌（はそう）、平瓶（ひたがめ・へいへい）、横瓶（よこべ）、提瓶（さげべ・ていへい）、高环、器台など多様なものがあったが、奈良・平安時代にはほとんど姿を消してしまふ。



須恵器の形



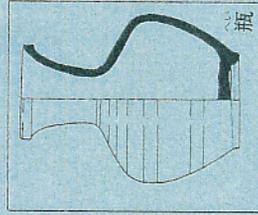
高台のついた皿が平安時代から多用されました。



食器として多く用いられました。高台のついたものもあります。



食器として用いられましたが、文字通り環の深い形のものも指します。



頸部の長いもの、短いものなどいろいろな形のものがある。主として液体を入れます。壺ともよばれる場合があります。



環の蓋が多い。平べったいつまみが付く。

第5回企画展

「山形県の古代窯業遺跡」展

開催にあたって

やきものは人々のくらしの上で、貯蔵あるいは供膳の食器として大きなつながりを持ち、今日の陶磁器まで発展してきました。その始まりは1万2千年以上も前の縄文時代の初期に求めることができます。こうしてつくられた土器が、1万年の間人々に受け継がれ使われて来ました。

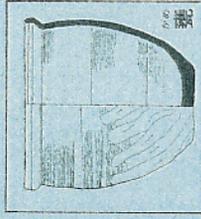
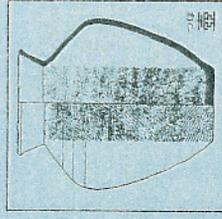
これが大きく変わるの、5世紀前半朝鮮半島からの影響で、技術革新が行われ「須恵器」という硬質の土器がつくられるようになってからです。これはいまの陶器の直接の先祖です。

山形県でこれが生産されるようになったのは、律令政権の勢力が及ぶ8世紀からと考えられます。そして平安時代後期の11世紀までつくられ使用されてきました。

この度、県内各機関からご協力いただき、主な窯あとの製品を展示しました。あわせて生産の様子やその移り変わりなどについても触れるようにしました。古代の息吹や須恵器そのものの持つ歴史的意味などについてもご理解いただければ幸いです。

1996年4月

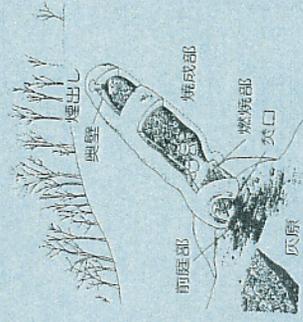
山形県立うさぎたむ風土記の丘考古資料館



窯のしくみ

斜面に溝を掘り、アーチ状に屋根をかけた半地下式と、トンネルを下から上に掘って作った地下式とがあります。

製品の安定をはかるため窯底が階段状になっているものもあるが、県内には見られません。



「窯跡復元図」



窯跡から出てくるもの

古代窯業では、中世・近世窯のようにサヤやツク・トチンなどの窯道具は見られません。変わりに須恵器の破片や石などが用いられ、製品の安定をはかっています。

窯体の下方には灰原（スチ場・物原）があり、失敗した製品、灰や炭、窯壁片などが大量に出土します。

土器の他に瓦を焼いたり、硯（すずり）を焼いた例も多いようです。

第5回企画展
山形県の古代窯業遺跡
＝ 解説と資料 ＝



開催期間 1996年4月27日～7月31日
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館